袖ケ浦市上宮田台遺跡の縄文時代後・晩期集落について

沖　松　信　隆

1．はじめに

上宮田台遺跡は，袖ケ浦市上宮田字羽雄に所在する。（第１図）首都圏中央連絡自動車道の建設に伴って，平成14年11月から平成16年３月まで，㈶千葉県文化財センターが発掘調査を実施した。対象面積は16,970㎡である。遺跡は旧石器時代から中・近世までの複合遺跡であるが，今回はそのなかでも縄文時代後・晩期の集落について紹介したい。

栃木県寺野東遺跡の調査を契機に，近年環状盛土遺構を伴う縄文時代集落の論議が盛んとなっている[1)]。当センターでも君津市三直貝塚を調査し，環状盛土遺構の内部に住居跡が検出され話題となった[2)]。また，盛土遺構とともに集落の中央窪地が改めて注目されており，流山市三輪野山貝塚での調査例[3)]が記憶に新しい。こうした状況のなか，上宮田台遺跡では後・晩期集落に伴う中央窪地がほぼ全域に近いかたちで検出された。近年の後・晩期集落の調査で，中央窪地全体を調査した例は少なく，三輪野山貝塚の場合も，窪地の規模自体が大きいためにある程度限定されたものであった。そこで本遺跡の調査例が基礎データのひとつとなれば幸いである。なお，データに統一性がない点もあるがご容赦願いたい。

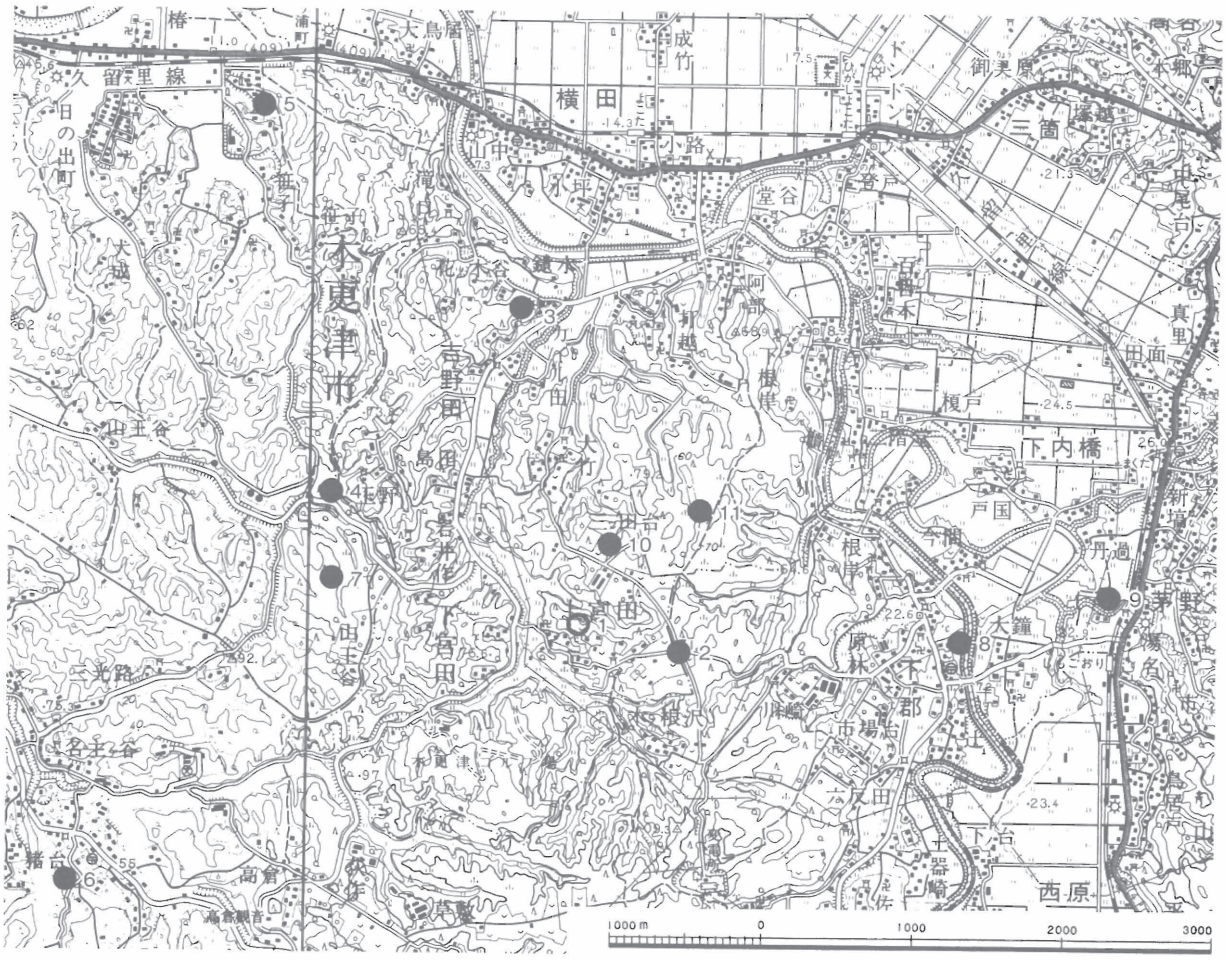
2．遺跡の概要と周辺の環境（第１図，第２図）

上宮田台遺跡（１）は，小櫃川の支流にあたる遣水川の流域に面した標高60mから68mの台地上に立地する。北西と西の方向から二筋の谷が入ることで，遺跡ののる台地は北西に突き出た舌状を呈する。さらに北側と西側に小さな谷が入る。水田面との比高差は約40mを測り，比較的急峻な斜面に囲まれる。

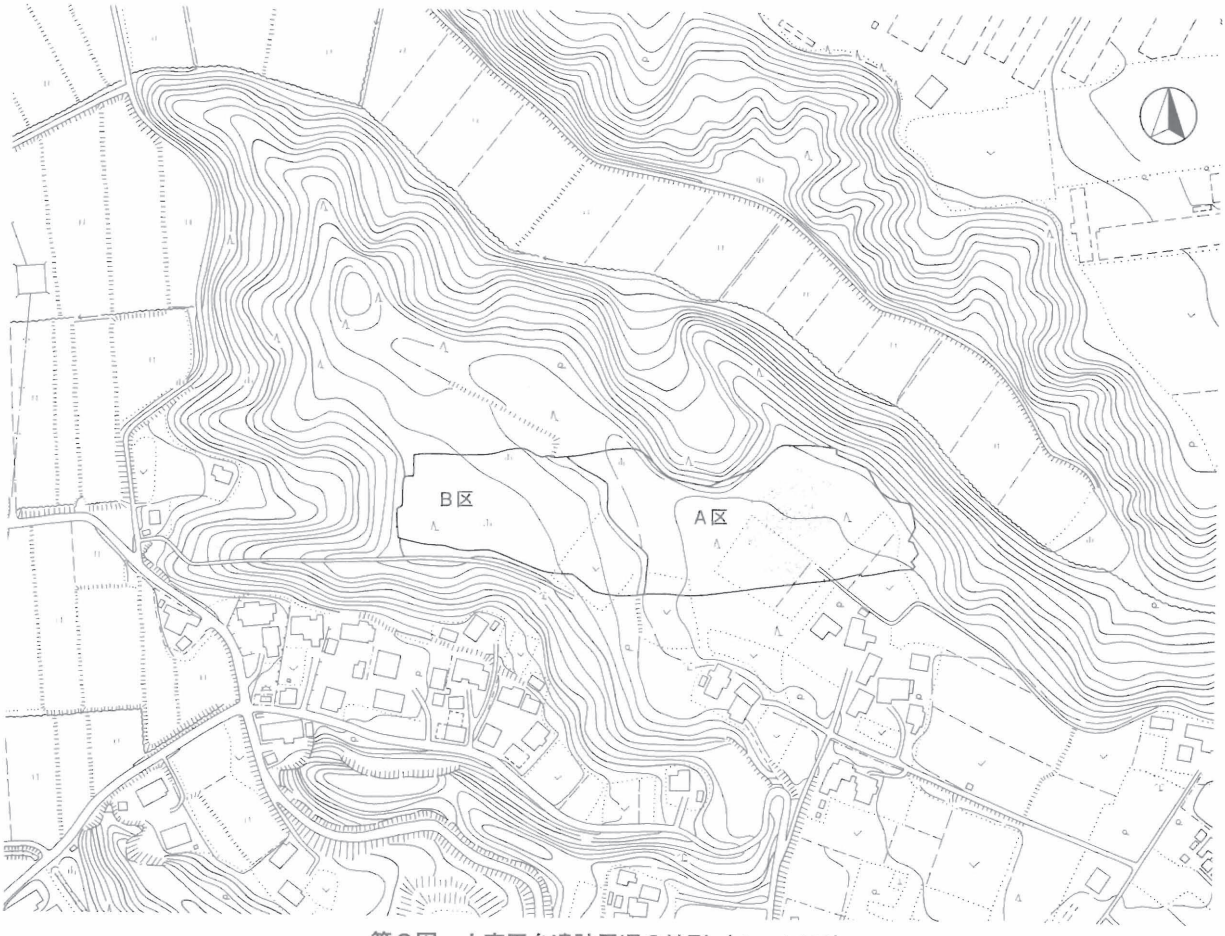
調査区中央付近には，北西から南東にのびる高低差２ｍほどの段差が存在する。これは中・近世の時期に形成された地形改変で，この段差を境に東西で遺構・遺物の内容が大きく異なる。便宜的に東側をＡ区，西側をＢ区と呼称した。

調査で検出された遺構等は，まず旧石器時代の石器ブロックが単独出土を含めて16カ所検出された。出土層位は分散しているが，Ⅳ層～Ⅴ層とⅨ層からの出土が多い。縄文時代では早期の炉穴と礫群が若干確認されたほかは，後期から晩期にかけての集落が主体である。後・晩期の遺物包含層がＡ区中央部の窪地地形（第２図スクリーントーン範囲）を中心に分布している。また，後期の小規模な地点貝層が北東部の斜面近くで検出された。なお，遺物は中期の加曽利Ｅ式土器も少量出土している。弥生時代の遺構は特に発見されなかったが，調査後に若干の土器が確認されている。古墳時代になると再び集落が形成されるようになり，後期を中心に竪穴住居跡14軒が検出されている。奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居跡も23軒確認された。これら古代の集落では，竪穴住居跡内に小鍛冶遺構を伴うものが見られる。中世から近世にかけては，大規模な地形改変が行われている。Ｂ区では台地整形遺構が確認され，多数の掘立柱建物跡とともに井戸跡・地下式坑などが検出された。また，Ａ区東端部では幅2.8mの大溝を伴う居館跡が検出された。周辺では青磁の破片が出土しており，構造等から13～14世紀の遺構と考えられる。このように検出された遺構等は多岐にわたるが，今回は縄文時代集落の紹介を目的とするので，縄文時代遺構の集中するＡ区の全測図（第３図）を掲載した。なお，縄文時代以外の土坑類や掘立柱建物跡は除外してある。全体の遺構配置や遺構数等の提示は今後に委ねたい。

周辺には旧石器時代から近世までの各時代の遺跡が分布している[4)]。縄文時代では早期の炉穴が比較的多く検出されており，近接する林遺跡（２）や木更津市矢那に所在する台木Ａ遺跡などで調査例がある。撚糸文系以降の遺物包含層も多く，撚糸文系終末期土器を出土した滝ノ口向台遺跡跡（３），沈線文系土器の蔵坪遺跡（笹子込山遺跡）（４）などが知られている。前期主体の遺跡は少なく，中台Ａ遺跡（５）ほかで竪穴住居跡を数軒検出している。中期の遺跡は比較的多く，中期前半の花山遺跡，中葉から後半の伊豆山台遺跡（両遺



第１図　上宮田台遺跡と周辺の遺跡（１：50,000）



第２図　上宮田台遺跡周辺の地形（１：4,000）

跡とも木更津市矢那）などがある。台木A遺跡では加曽利E式期の集落をほぼ全域調査した。また徳蔵寺貝塚(6)や祇園貝塚（木更津市祇園）で加曽利E式期から貝層が形成される。祇園貝塚は君津地方最大級の貝塚であったが消滅してしまった。

後・晩期に入ると一般の集落遺跡は減少し，貝塚を伴う遺跡が主体となる。後期前半以降の遺跡には，中期から続くものを含めて徳蔵寺貝塚・祇園貝塚・永井作貝塚（木更津市永井作）・伊豆島貝塚(7)・峰ノ台貝塚（木更津市矢那）が挙げられる。峰ノ台貝塚と祇園貝塚では，安行式期の竪穴住居跡が検出されている。永井作貝塚は堀之内式・加曽利B式期の低地遺跡であるが，現在は壊滅状態である。伊豆島貝塚は加曽利B式を主体とし，晩期千網式も出土している。晩期後半の遺跡は散布地に限られる。低地遺跡の沢間遺跡(8)・丹過遺跡(9)などがあり，林遺跡では荒海式が出土している。なお，君津市三直貝塚までは直線距離にして約10㎞である。

縄文時代以降では小櫃川・遣水川沿いの台地縁辺に古墳群が目立ち，弥生時代から連続する遺跡も多い。当遺跡近辺の調査例としては，三ツ田台遺跡・古墳群(10)，向神納里遺跡・古墳群(11)などが知られる。特に向神納里遺跡では，弥生時代中期の方形周溝墓が検出され注目された。奈良・平安時代の遺跡も比較的多く，丹過遺跡は，飛鳥・奈良時代の官衙遺跡の可能性が高いことで注目される[5]。

3．縄文時代後・晩期集落について（第3図～第6図）

（1）中央窪地の概要

A区の中央部には窪地地形が存在し，その内部は縄文時代後・晩期の遺物を多量に含む黒色土で覆われていた。周辺には縄文時代後・晩期の遺構が確認されたことから，この窪地はいわゆる集落の中央窪地にあたると考えられる。窪地の形状は現地形を見る限り閉塞しており，調査区外はむしろ尾根状となっている。しかし遺物包含層を除去した結果，窪地はいったん閉塞しかけた後，北側に開口する谷となっていた。また，谷との合流地点から東側の斜面には，黄褐色土が大量に堆積している様子が窺えた。このことから現地形の尾根の性格も自然地形とは異なることが予想される。

それでは次に，窪地の土層堆積状況についてみてみたい（第4図，第5図）。窪地の内部は，およそ3層構造になっており，最上層は表土とほとんど区別がつかない灰褐色土が堆積している。（第4図1層）この層には近世の遺物が含まれ，近世以降の攪乱を受けている。

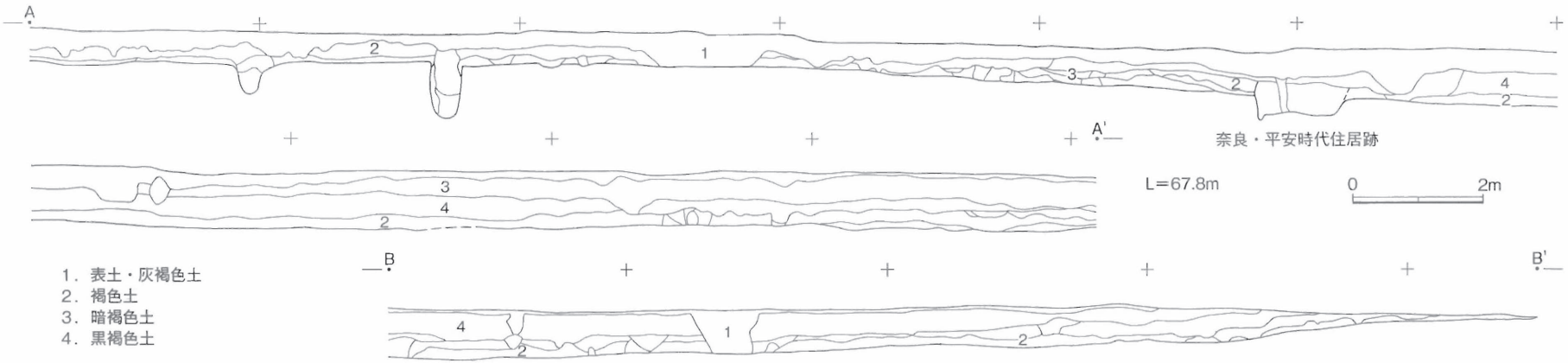
中層には暗褐色土（3層）ないし黒褐色土（4層）が堆積している。この層が窪地の主要な覆土であり，また縄文時代後・晩期の遺物包含層になっている。しかし若干の土師器とともにスラグが含まれていることから，少なくともこの層の上部は古墳時代以降の攪乱を受けている可能性が強い。窪地北西部で検出した奈良・平安時代の住居跡も，中層上部を切り込んでいる様子は確認されなかった。上部に比べ，下部の黒褐色土は比較的安定した層と思われるが，後期の遺物が比較的多く含まれる。最下層が晩期の包含層であることから，これもまた縄文時代晩期以降の再堆積と考えられる。なお，上部・下部ともに特徴的な混入物として，炭化物と焼獣骨粉が含まれる。骨粉は，全体に散在するような印象であるがその中にも粗密の差がみられ，集中範囲が確認できた。（第6図）確認面は中層下部である。南端部については調査方法が異なっていたため範囲の確認を行っていない。ただし，出土した資料を観察する限り，骨片と呼ぶべき大きさのものが他の地点よりも多く見られた。おそらく最も良好な骨粉（片）の集中域が存在したのであろう。

最下層（2層）には褐色土が堆積しており，晩期中葉から後半の遺物を大量に含んでいる。概ね中層までに比べてしまりが強く，この層の上面で柱穴等のプランを確認することができる。混入物は中層と似たような内容で，骨粉も含まれる。東側の立ち上がり付近では，さらにこの層の下に黄褐色土が堆積していた。遺物は前浦式と浮線文系のものを主体とし，大型破片や小型土器など比較的まとまった出土傾向がある。遺物の出土レベルは窪地の底面直上まで達する。

褐色土ないし黄褐色土の下には，自然堆積的な間層はなく，すぐ地山となっている。しかも窪地範囲内の地山はほとんどハードロームが検出され，立川ロームの上部が消失している。この傾向は窪地の内部にいくほど顕著で，断面図（第5図）に示した中央部では立川ロームV層までが消失していた。

中層の暗褐色・黒褐色土には炭化物等の混入物が入っていることから，人為的な影響を受けた土層と言えるが，ローム粒等の量はさほど多くなく，盛土的な要素は認められない。かつて松戸市貝の花貝塚や佐倉市吉見台遺跡で報告された「漆黒土層」[6]と同様の土層と言えよう。一方，最下層の褐色土は，この層上面付近で焼土や炉跡，ピットのプランを確認できることから，より人為的な整地層と考えられるのではないだろうか。地山との境界は，断面図では便宜上なめらかなラインとしているが，一部に図示したように実際に

第3図　A区遺構分布図（1：800）



第4図　窪地土層断面図①（1：100）

第５図　窪地土層断面図②（１：100）

第６図　窪地骨粉分布図（１：1,000）

はかなり凹凸が激しい状況である。

（２）窪地周辺の状況

窪地の周辺は比較的平坦な地形がひろがり，A区西側の段差近くから緩やかな傾斜が始まる。A区南西部の崖面に観察できる遺構検出状況から，本来の地形はB区に向かって緩やかに傾斜する斜面であったと推測される。北側から北東側にかけての斜面は急峻であり，特に東側は中世の地形改変の影響で崖面となっている。表土を除去すると崖面に縄文時代後期の遺構のプランが確認できた。

窪地西側の縁辺部は平坦であるものの，地山との間に漸移層的な土層が確認でき，遺構確認面がやや高い傾向があった。

このほか微地形として，窪地の西側に隣接する北側の谷の縁辺部が土手状に高まっているのが観察された。土手の一部にトレンチを入れたところ，後期の遺物を包含する暗褐色土が検出され，当初はこれを盛土遺構に類するものではないかと想定した。その後別地点にトレンチを入れた結果，良好な遺物包含層や再堆積ローム土も確認されず，谷側の堆積土もさほど厚くないことから，盛土遺構ではないと判断した。

ここで，窪地外側の西側平坦部の土層の状況を見てみたい。西側地点には窪地内のような黒褐色土はみられないが，表土下には後期を主体とする遺物包含層が存在する。遺物の出土する範囲は，中央部では窪地の立ち上がりから25mくらいまでで，西側の斜面寄りから遺物量は極端に希薄になる。遺物包含層は主に２層

から成り，表土下に褐色土（２層），その下に暗黄褐色土が堆積し，地点によっては褐色土下に暗褐色土がみられる。褐色土は，窪地内の褐色土とは異なり骨粉などの混入物をほとんど含まないが，地点によって焼土や炭化物の広がりが検出された。また断面図を見ると褐色土を切るピットの覆土が観察できる。（第４図）このピットは六角形柱穴配置の住居跡の一部であるので，その住居跡の床面は少なくとも褐色土の上面にあたると言えよう。暗黄褐色土は，一見すると自然堆積の漸移層のように思えるが，褐色土と同様な遺物を含んでいることから再堆積土と判断した。このように，窪地西側の堆積土層は，最下層の黄褐色土を含めて人為的な土層と考えられる。しかも同一面に焼土や炭化物が分布していることや，住居跡の床面としての利用も考えられることから，より積極的な盛土であった可能性も高いのではないだろうか。

これと比較すると窪地東側の状況は異なり，地点によりやや複雑な様相を示す。まず東側中央部では土層が薄く，遺物を含む褐色土を除去すると地山のソフトロームが検出できた。西側で見られた黄褐色系の土層は確認されず，西側ほど人の手が加わっていないように思える。またこの地点では縄文時代の遺構も希薄であった。次に窪地南端部と中世居館の大溝に挟まれた部分は，地形的にはほとんど平坦であるが地山の表面が若干消失している。さらに，窪地内と同様の遺物を含む黒褐色土が確認されるので，窪地の延長ととらえることもできよう。また，北東部では，窪地の外側であっても遺構の壁の立ち上がりがほとんど残っていなかった。焼土などの検出状況も西側地点に似ており，この地点にも本来は盛土があった可能性が考えられよう。

次に北側斜面の土層堆積状況についても触れておきたい。窪地の西側では土層の発達がみられないが，東側では特徴的な土層が確認された。窪地東側の調査区北端部に設けた確認坑（第３図破線部分）での様相を述べる。表土は窪地周辺に比べてしまりが弱く，ほぼ自然堆積とみられる黒褐色土である。その下には暗褐色土・褐色土と，窪地と似たような土層が確認されている。さらに褐色土の下には，黄褐色系の土層が地山直上まで１ｍ以上堆積していた。この黄褐色土には，加曽利Ｂ式土器を主体とした後期の遺物が含まれる。

（３）遺構の分布状況

すでに記したように，遺構の分布内容はＡ区とＢ区で大きく異なる。Ｂ区は中・近世での地形改変や遺構構築が著しく，縄文時代の遺構としては竪穴住居跡をごく数軒確認している。時期は後期に属する。Ａ区の縄文時代の遺構は，前述のように後・晩期の竪穴住居跡や土坑群が主体である。ただし住居跡のほとんどは，壁の立ち上がりが残っていなかったため，多くの場合炉と柱穴の配置関係からプランを想定している。一方でＡ区南西部の崖面では，堀之内式期の住居跡をほぼ本来の掘り込みに近い深さで検出できた。遺物包含層も良好に残っていたため，中・近世の地形改変が及ぶ前の地形を推測する手がかりとなった。

それでは後・晩期の遺構分布状況をみてみたい。おおまかには，窪地周辺に展開する集落と，西側の緩斜面に占地するグループの二つに分けることができる。窪地周辺の集落については，北側の斜面縁辺部から窪地西側の平坦部にかけての一群と，調査区南縁部周辺の一群に分けられよう。後者はさらに調査区外へ遺構が展開していることが予想される。北側の遺構群と南側の遺構群がそれぞれ弧状に相対していると言えようか。特に北側での遺構の重複が著しい。現地調査の段階で認定した住居跡数は67軒であるが，所属時期の認定も含め今後の整理作業で変更する可能性が高い。特に窪地の内部で検出した遺構は，確実に共伴する遺物が少ないため時期の認定に困難を伴う。およその傾向として堀之内式期のものが多いと考えるが，加曽利Ｂ式期のものも含まれるだろう。また，明らかに晩期とされる住居跡は，窪地西側から北側の谷部分および窪地北東部で検出した。およそ安行3a式から安行3b式に所属するとみられる。軒数は少ないが，特定の地点への集中や建て替えが目立つ。方形プランと円形を基調としたプランのものがある。

検出した土坑は約40基で，集落の規模からすれば少ないほうであるが，内容的には円形の袋状土坑が特徴的である。時期は堀之内式と加曽利Ｂ式にほぼ限定され，窪地の東側に散在する傾向がある。また長方形ないし楕円形の土坑も検出されており，これには墓坑が含まれると思われる。この種の遺構が窪地西部の斜面に並ぶように検出されている。これ以外に柱穴状のピットが数百基検出されている。ピット群のなかには住居跡の柱穴も含まれ，実数はまだ確定していない。これらの遺構も，概ね後期前半から中葉に所属すると思われる。後期安行式については，遺物の出土はみられるものの，確実にこの時期とされる遺構は不明であった。Ａ区東側の崖面では，加曽利Ｂ式期の竪穴状遺構を検出している。中世以降の削平により，遺構の３分の２は消滅しているが，掘り込みの深さが見てとれる。周辺には土坑や溝状遺構が群在する。このほか，中世居館跡の東端部付近で晩期の不整形な小竪穴

状の遺構を検出した。性格は不明であるが，完形に近い土器が出土している。

以上の遺構群と窪地との関係についてみてみると，窪地の内部にも住居跡やピットが多く検出されている。窪地内の占地状況は，南北それぞれの縁辺部付近に最も多く，低位面にも分布している。
ピットは低位面から縁辺部まで全体に散在している。調査時は，窪地を囲むように遺構群が分布しているイメージを持っていたが，調査後の全測図を見る限り，現状の窪地を意識した配置にはなっていないという印象を得た。

このほか小規模な地点貝層が北東部の斜面周辺で検出されている。斜面際のものは表面から観察でき，およそ３ｍ×2.5mの範囲に２ブロックが確認できる。掘り下げに伴い，北側斜面にもさらに１ｍ程度の小規模な貝層を暗褐色土下に確認した。これ以外にも同一の地点で土坑に伴う貝ブロックを検出している。時期的には堀之内式から加曽利Ｂ式の間に形成されたもので，ハマグリ・シオフキ・ツメタガイなどを含む。またキサゴ類のブロックや灰層も観察される。これ以外にもピットに伴う貝ブロックが数カ所検出されているが数は少ない。

北側斜面周辺については，興味深い遺構が認められる。窪地と谷の合流付近では，谷側にやや下った位置で安行3b式期の竪穴住居跡を検出した。入り口ピットも良好に残り，炉に伴う方形の区画が確認されている。この遺構の南東側は地山への掘り込みが明瞭であったが，北西側は明らかに斜面への盛土によって壁や床面を構築していたものと思われる。また，この遺構を切る溝状遺構を含め，北東側斜面には，斜面の切り出しや溝状遺構が認められる。これらの遺構のうち，前述した貝層と関わるものは明らかに加曽利Ｂ式期かそれ以前の所産であり，他の同様な遺構も概ね縄文時代に所属する可能性が高いと考える。

（４）遺物について

今回は後・晩期集落の概観を示すことを優先したので，遺物の図面・写真を提示できなかったが，資料内容に注目すべき点が多く，出土状況を含めて概要を簡単に触れておきたい。

遺物包含層の主体時期は，窪地の範囲では圧倒的に晩期優勢である。晩期のなかでも，前浦式から浮線文系土器の初期段階のものが最下層から多数出土している。本遺跡の浮線文系土器は，白井市向台Ⅱ遺跡[7]を標識とする「向台段階」（向台Ⅱ式）に相当する土器群である。向台Ⅱ式は，大洞Ｃ２式～Ａ式前半に並行する土器群として設定された[8]ものであり，近年では茂原市下太田貝塚[9]で良好な資料が出土している。ただし千葉県内全体の資料数はまだ限られたものであり，基礎資料の充実をはかるうえで当遺跡の資料が期待される。

晩期の土器は，安行3a・3b式と姥山式も多く出土し，遺構を伴っている。このほか安行3c・3d式・大洞系土器が客体的に出土した。窪地内では後期の土器は少ないのに対し，窪地西側の推定盛土範囲や北側斜面の盛土には，加曽利Ｂ式を主体に堀之内式・曽谷式・安行１式・２式がみられた。窪地内では，後期前半中心の遺構が検出されているにもかかわらず，堀之内式がほとんど出土していないのは注目に値する。

土器以外では，土偶・土板・動物型土製品・石棒・石剣・独鈷石・玉類などの特殊遺物が挙げられる。また，磨製石斧が多く出土している点も特徴的だと思う。大小多様なサイズがあり，小型のものは実用品以外のものも含まれるのだろう。これらの遺物は，主に窪地内の褐色土から出土した。なお，君津市鹿島台遺跡で出土した砥石状品[10]と同様のものが出土している。三直貝塚での出土例もあり，今後注意すべき資料である。

４．まとめ

以上，中央窪地とともに周辺の遺構分布や土層の堆積状況について概観してきた。遺構の所属時期や遺構数などはまだ確定した内容ではないが，現段階でとらえ得る後・晩期集落の様相についてまとめてみたい。

本遺跡で本格的に集落が形成され始めたのは堀之内式期からで，加曽利Ｂ式期ないしは曽谷式期にかけてある程度連続して遺構が構築されたと考えられる。中央窪地周辺の集落は，Ａ区北側の斜面縁辺から窪地西側地点までと，南縁部から調査区外にかけて，概ね弧状に竪穴住居跡が分布するものと思われる。窪地東側の北東部から南東部にかけての空白地帯には袋状土坑が点在する。佐倉市井野長割遺跡でも，筒型の深い土坑が検出されている[11]。時期は後期後半であり，規模も大きく形状も異なるが，本遺跡例との類似性が指摘できよう。

後期前半から中葉を含む遺構群は，窪地の内部にも占地している。住居跡の壁は検出されず，遺構の直上まで晩期の遺物包含層が堆積していた。

こうした状況から，これら後期の遺構群は晩期までのある時期に削平されたと考えられる。さらに，堀之内式の段階では，現状の窪地は存在しなかったか，あるいはより狭い範囲であったことが想定される。加曽

利B式の段階になると，北側斜面での台地整形の痕跡が確認できる。また，斜面で検出された再堆積のローム土には主に加曽利B式土器が含まれていた。以上の点を考慮すると，少なくとも加曽利B式期から斜面への盛土と整形が行われたと考えられよう。貝層の形成と合わせて，斜面付近の積極的な利用が窺える。そしてこの時期以降に構築された溝状遺構が数条確認されているが，近年報告例が増えている道跡[12]の可能性もあり，注意を要する。

後期安行式の頃の土地利用については不明な点が多い。晩期に入ると，安行3a式期から安行3b式期にかけて，窪地西側から北部において遺構の構築が行われる。北側斜面には盛土で壁を形成したとみられる安行3b式期の竪穴住居跡を検出した。窪地西側には盛土形成が想定され，窪地内遺物包含層の最下層には晩期中葉の遺物も含まれることから，この時期までに現状の窪地地形が形成されたと思われる。そして続く前浦式・向台Ⅱ式の段階にかけて，窪地内の褐色土層を整地面として利用したことが考えられる。

ここで，他遺跡との比較を行うべきところであるが，別稿にて予定しているので割愛させていただきたい。

5．おわりに

本遺跡の周辺は，これまで縄文時代後・晩期の遺跡が貧弱な地域と言えよう。貝塚のほかは，竪穴住居跡を数軒検出したのみの小規模な遺跡と散布地があるのみで，拠点的な集落は確認されていなかった。こうした環境のなかで，本遺跡の集落は特異な性格を持つ。向台Ⅱ式が出土したこともあわせて，当地域での重要な調査例となろう。

最後に，本遺跡の調査に携わった南部調査事務所の職員各氏（当時），本稿を執筆するにあたり協力いただいた中央調査事務所の職員各氏に厚く感謝いたします。また，現地調査から本稿執筆の際に以下の方々からご教示を頂いた。あわせて感謝申し上げます。（順不同・敬称略）

石井　寛，江原　英，高橋　誠，犬塚俊雄
稲野裕介，稲野彰子，近藤　敏，忍澤成視
松本　勝，西野　元，小林清隆，上守秀明
渡辺修一，安井健一，大内千年，吉野健一

註

1）阿部芳郎氏の論考（阿部1996）や縄文時代文化研究会による第1回研究集会「縄文時代集落研究の現段階」における江原　英氏の発表（江原2001）など

2）吉野健一　2001「第3回最新出土考古資料巡回展に伴う講演会の記録集（2）君津市三直貝塚の調査」『研究連絡誌』60 ㈶千葉県文化財センター　ほか

3）流山市教育委員会　2001『三輪野山貝塚現地説明会資料 三輪野山貝塚第8地点の調査』

4）周辺の遺跡分布について，主に次の文献を参考にした。
㈶君津郡市文化財センター　1994『林遺跡Ⅱ』
㈶君津郡市文化財センター　1995『台木A遺跡』
木更津市教育委員会　2000『木更津市文化財調査集報4 ― 伊豆山台遺跡・金鈴塚古墳 ―』

5）半澤幹雄　2004「丹過遺跡」『平成15年度　千葉県遺跡調査研究発表会　発表要旨』

6）中央窪地に堆積した黒色土層については，貝の花貝塚（八幡・岩崎・関根ほか1973）や吉見台遺跡（近森・藤村ほか1983）の報告で注意がはらわれている。堀越正行氏は，これを「漆黒土」として自然堆積の側面を強調し，窪地の湿潤な状態を示唆した。（堀越1995）

7）㈶印旛郡市文化財センター　1991『松戸市営白井聖地公園埋蔵文化財調査報告書　向台Ⅱ遺跡』

8）渡辺修一　1991「南関東ブロック　南関東地方における畿内第1様式並行期の土器群とその変遷」『第1回　東日本埋蔵文化財研究会　東日本における稲作の受容 ― 第Ⅰ分冊 研究発表概要・追加資料 ―』

9）㈶総南文化財センター　2003『下太田貝塚』

10）小林清隆氏はこの砥石状品を後・晩期に特有な遺物として「墨型石製品」と呼称し，砥石とは異なった性格を示唆している。（白井・小林2002）

11）㈶印旛郡市文化財センター　2003『井野長割遺跡現地説明会資料』

12）佐倉市宮内井戸作遺跡，井野長割遺跡ほかで報告例があり，領塚正浩氏が集成・分類を行っている。（領塚2004）

参考文献

阿部芳郎　1996「縄文時代のムラと「盛土遺構」―「盛土遺構」の形成過程と家屋構造・居住形態 ―」歴史手帖24-8

江原　英　1999「寺野東遺跡環状盛土遺構の類例 ― 縄紋後・晩期集落の一形態を考える基礎作業 ―」『研究紀要』7　栃木県埋蔵文化財センター

2001「環状貝塚・環状盛土遺構」『発表要旨縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会

㈶印旛郡市文化財センター　1998『宮内井戸作遺跡Ⅰ地区』

㈶印旛郡市文化財センター　2004『井野長割遺跡（第4次調査）』

白井久美子・小林清隆　2002「縄文時代後期の大型住居と舟の線刻をもつ須恵器 ― 鹿島台遺跡の調査概要と新資料の紹介 ―」『研究連絡誌』63　㈶千葉県文化財センター

近森　正・藤村東男ほか　1983『佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要Ⅱ』佐倉市遺跡調査会・佐倉市教育委員会

堀越正行　1995「中央窪地型馬蹄形貝塚の窪地と高まり覚書」史館26

領塚正浩　2004「縄文時代の道路跡」『史館』33

八幡一郎・岩崎卓也・関根孝夫ほか　1973『貝の花貝塚』松戸市教育委員会